

## 障害児保育における重要事項

Important points in nursery for children with disabilities

桃井 克将<sup>1</sup>

<sup>1</sup>徳島文理大学保健福祉学部人間福祉学科

Katsumasa Momoi<sup>1</sup>

<sup>1</sup> Department of Human Welfare, Faculty of Health and Welfare, Tokushima Bunri University  
Nishihama, Yamashiro-cho, Tokushima, Japan 770-8514

キーワード：保育，障害，バイステックの7原則

Key words : Child care, Disability, Biestek seven

### 抄録

本稿では、「障害児を支援する際の重要要素」と題し、学生が障害児とかかわる際に重要であると感じる事柄を「バイステックの7原則」を用いて整理し、今後の障害児保育における教授内容の一助を得ることを目的とした。結果、児童を対象とする保育士を目指す学生ならではの回答が得られ、その結果はグループごとに異なっていた。本演習で学生は、それぞれが実習で体験したことやこれまでに学習してきたことを参考に活発に議論していた。本演習は、「こうするべきだ」という「べき論」に立った援助ではなく、それぞれの保育士によって価値観も違う中、児童のよりよい生活を目指し援助している点を、特に障害児支援に着目しながら理解させるために実施した。どうしても、理論系科目で扱われる「～の原則」といったものが出てくると、「そうしなければならない」と型にはまってしまう。勿論、型を用いることも大切であるが、それぞれの援助者の価値観も重要視しつつ、お互いに連携しながら関わっていくことの重要であることをグループワークを通して学ぶ機会となったのではないだろうか。

### 1. 序論

対人援助における根源的な原則として、「バイステックの7原則」<sup>1)</sup>が挙げられる(表1参照)。児童福祉法において保育士は、第18条の18第1項の登録を受け、保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者<sup>2)</sup>であり、児童ならびに保護者とかかわる中で様々な保育に関する指導を行うため、対人援助の基礎となる知識が必要となることは言うまでもない。すなわち、対人援助の原則である「バイステックの7原則」についても保育士は理解しておくことが望まれる。

ところで、近年、インクルーシブ保育などの言葉が用いられ、障害の有無に関わらず、様々な背景を持つ児童を保育していくことが謳われている。インクルーシブ保育の是非はここでは議論しないが、様々な保育現場で障害児とかかわる可能性がある保育士にとって、「バイステックの7原則」を

用いて障害のある児童にかかわることは重要と言える。

本稿では、『障害児を支援する際の重要要素』と題し、学生が障害児とかかわる際に重要であると感じる事柄を「バイステックの7原則」を用いて整理し、今後の障害児保育における教授内容の一助を得ることを目的とする。

表1. バイステックの7原則

個別化	一人ひとり価値観も異なるため、利用者を一人の「個人」と捉え、利用者へ他逸して同じ障害や病気であっても個別的な対応をすること。
意図的な感情表出	利用者が自由に感情を表すことが出来るように関わること。
統制された情緒的関与	利用者の感情と支援者の感情が混同しないように吟味しながら関わること。

受容	利用者のありのままを受け入れること。
非審判的態度	利用者の発言などについて、そのよし悪しを支援者が決める関わりは慎むこと。
自己決定	利用者が自身の意思で決定出来るよう働きかけること。
秘密保持	プライバシーは守り、保護しなければならないこと。

## 2. 方法

### 2.1. 対象者

保育系学生 44 名

### 2.2. グループ分け

グループは、ランダムに 8 グループに分けた。一つのグループは 5 名ないし 6 名となった。

### 2.3. 講義の流れ

はじめにバイステックの 7 原則について、簡単に説明を行い、それぞれの原則の意味を理解させた。なお、対象学生は、事前に他科目において、バイステックの 7 原則を学習済みである。

その上で、「障害児およびその家族に対して保育士としてかかわる際を想定し、バイステックの 7 原則の中で最も重要であると思うものから順位付けをしてください」とテーマを呈示し、図 1 のように冒頭に 5 分程度個人で順位付けをさせ、その後、各グループで順位付け (30 分) をさせた。

また、順位付けとともに、何故そのような順位をつけたのか理由を書かせた。

最後に、各グループから各原則の順位を発表してもらい、教員から全体の総括を行った。



図 1. 講義の流れ

## 3. 結果

各グループで話し合いを終えたあとの順位付けは、表 2 の通りである。なお、表 2 において、7 原則すべてが重要であることは大前提として、その中で最も重要であると思う原則を「1」、全く重要ではないと思う原則を「7」とし、順位付けを示している。なお、最上段の「G」はグループを表し、表内の斜体文字が各グループの順位付けである。

各原則の順位付けを詳しく見てみると、個別化においては、概ね高順位のグループが多かった。例えば、1 位としたグループの理由は、「一人ひとりに合わせた対応をすることで相談しやすい環境をつくることができる」との意見が出され、「信頼関係」の構築のためとするグループが多かった。

意図的な感情表出は、上位に位置づけたグループと下位に位置づけたグループが混在した。上位としたグループの理由は、「対象者の本音を掴み取りやすくなる」などがあり、下位としたグループは、「マイナス感情を逆に溜め込んでしまう」などがあった。

統制された情緒的関与は、全体的には下位に位置づけたグループが多いものの、1 位としたグループも見られた。下位としたグループの理由は、「必要ではない」、「平常心を保つのは保育士側の問題だから」などが挙げられた。一方 1 位とした理由は、「冷静に相手と向き合わない」と解決できる問題も解決できない」というものであった。

受容についても、上位としたグループが見られる中、下位としたグループもあった。上位の理由は、「まずは受け入れるところから始まるから」などがあり、下位の理由は、「全て受け入れて良い訳ではない」としていた。

非審判的態度は、下位としたグループが多かった。7 位、すなわち重要ではないとした理由は、「あまり重要ではない」、「時には審判も必要」などが挙げられた。

自己決定については、下位としたグループが目立った。理由としては、「一人では決められない」、「これから一人で決められるように援助する」といったような意見が多かった。

秘密保持は、1 位に位置づけたグループと 7 位に位置づけたグループといったように上位と下位の各グループが混在した。1 位の理由は、「秘密を守ることで信頼を得られる」、「プライバシーの侵害にかかわる」などがあり、下位の理由は「他の

原則ほど重要ではない」、あるいは「特に理由が無い」といったものが多かった。

表 2. 各グループの順位付け

	1G	2G	3G	4G	5G	6G	7G	8G
個別化	2	3	1	2	2	3	3	1
意図的な感情表出	5	2	3	3	3	2	6	3
統制された情緒的関与	6	6	5	6	4	1	7	4
受容	3	1	6	4	1	4	2	2
非審判的態度	7	7	4	5	5	5	4	7
自己決定	4	4	7	7	6	7	5	6
秘密保持	1	5	2	1	7	6	1	5

#### 4. 考察

本稿では、学生が考える『障害児を支援する際の重要要素』を把握するべく、バイステックの7原則を用いて演習形式の講義を紹介した。

本演習の対象が保育を主として学ぶ学生であるため、援助の対象として思い浮かべるのは児童である。福祉における援助では、近年、自己決定が重要視され、意思決定支援を的確に行うことが必要とされている。例えば、障害が重度である場合には成年後見制度なども利用するが、その場合には自己で判断することが難しいというエビデンスの基、成年後見制度などを利用する必要があると言われている。このような中、福祉を学ぶ学生においては特に、自己決定を重要視する傾向があるように思われる。

しかし、今回の結果の中で、自己決定を見ると、「一人では決められない」、「これから一人で決められるように援助する」などを理由に下位とした

グループが見られた。下位とした理由の中には、「本人が成長したときに自己決定が出来るようにする」といったものもあり、児童と関わる保育系学生だからこそ示された理由ではないかと推察される。福祉系の学生で児童分野において実習を行った者などに同じ内容を聴くと異なる結果が生まれるかもしれない。今回は、保育系を専攻する学生だからこそ重要視する部分や逆に重んじる必要が少ないと判断する部分もあり、今後は他職種を目指す学生との比較も行う必要がある。

また、本演習では、障害児と関わる際という限定的な内容とした。よって、個別化などが上位となっている。この結果は、障害のない児童の場合にも共通するのだろうか。障害のない児童を対象とする場合の結果と比較することで、新たな知見が見出されるかもしれない。

本演習で学生は、それぞれが実習で体験したことやこれまでに学習してきたことを参考に活発に議論していた。本演習は、「こうするべきだ」という「べき論」に立った援助ではなく、それぞれの保育士によって価値観も違う中、児童のよりよい生活を目指し援助している点を、特に障害児支援に着目しながら理解させるために実施した。どうしても、理論系科目で扱われる「～の原則」といったものが出てくると、「そうしなければならない」と型にはまってしまふ。勿論、型を用いることも大切であるが、それぞれの援助者の価値観も重要視しつつ、お互いに連携しながら関わっていくことが重要であることを学ぶ機会となったのではないだろうか。

#### 参考文献

- [1] フェリックス・P・バイステック著、尾崎新ほか訳。ケースワークの原則—援助関係を形成する技法。新訳改訂版、誠信書房、2006、p.1-254
- [2] 電子政府の総合窓口 e-Gov. “児童福祉法”. 総務省.  
[http://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws\\_search/lsg0500/detail?lawId=322AC0000000164&openerCode=1](http://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/detail?lawId=322AC0000000164&openerCode=1), (参照 2017-10-2).

---

**Abstract**

---

In this paper, we have summarized the important items in childcare for the handicapped using “Biestek seven”. The subjects are college students enrolled in a nursery teacher training course. In the lecture, a group work was conducted. As a result, the responses differed from group to group. Even if the same elements in Biestek seven were used, the order was different depending on the group. Comparing this result with students studying welfare does not mean that different results will be obtained.

---

(受付日 : 2017 年 10 月 19 日, 受理日 : 2017 年 10 月 30 日)

桃井 克将 (ももい かつまさ)

現職 : 徳島文理大学保健福祉学部人間福祉学科講師

神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士後期課程修了.

博士 (学術), 社会福祉士, 精神保健福祉士

専門は発達障害支援論 (脳科学・障害福祉). 現在は障害のある人への支援について脳機能の観点から研究を行っている. また, 社会福祉士養成教育に関する研究にも力を注いでいる.

主な業績 : Momoi et al : Relationship among eating behavior, effortful control, and personality traits in Japanese students : cross-sectional study. Br J Med Med Res 18(8)1-9, BJMMR.29729, 2016

Momoi et al : Relationship among eating behavior, effortful control, and working memory in female young adults. Health 8:1187-1194, 2016